

前号で胃、ろ、うのことに触れたら、いろんな人からリアクションをいただいた。

やはりおおくの人が延命処置は必要ない、と願っているみたいだ。だが、自分はいいとしても、目の前の家族の死を決断するのは難しい、とおもっている人もおおい。「父が胃ろうで生きながらえています」という人もいる。「死」は悩ましいものである。

若いころは、自分の死は自分で決める、なんていきがっていたが、歳を重ねていろいろなことを見聞きしているうちに「死」は残された者にゆだねてもいいのではないか、とおもうようになってきた。

生前葬というのがある。生前世話になった人に自分の口で感謝の念をあらわすとか、自分のおもいどおりの葬儀ができるといわれているが、なんとなく違和感を感じている。人は生まれてくるときは自分の意志に関係なく生まれてくる。思春期に親に反抗するとき、「生んでくれと言った覚えはないぞ」と毒ついた人もいるだろうが、まったくそのとおりで、ハイテガールも人は望まれもしないのにこの世間に投げ出されている存在だといっている。では、生きているあいだは自分の望んだ生き方ができるかといえば、それも危うい。一生をふり返って「満足だった」と死ぬる人はいるのだろうか。ほとんどの人が、「まああの人生だった」というだろう。その「まあまあ」のなかには、忸怩たるものはあるが、すべてを否定したり後悔したりしたら、自分の存在理由がなくなるので「まあまあ」といっておこう、という消極的な「まあまあ」ではないだろうか。ぼくの

バスを降りると歩いていた
半分崩れた家々が寄り添うようにある
村の一角を
もし私が少女だったら父親が
絶対に行つてはいけなと言つたであろう
そんな場所

窓ガラスのない家の奥から
誰かが覗いている
道端に干からびて半分骨を見せた魚が
落ちている
埃まみれの腰布を巻いた上半身裸の男が
路地裏に消える

私はもうすこしで川に突きあたるあたりで
しゃがみこむ
炭水化物も蛋白質もビタミンも
使い果たした
子どもたちが寄ってくる

一生はそんな「まあまあ」だったとおもう。

では、死ぬときぐらい、自分のおもった死に方をしたい、とおもうのは最初で最後の権利のような気がする。ぼくの場合、倒れたら胃ろうや鼻腔チューブなどの延命処置は不要で、葬祭センターでの葬儀も必要ではなく、火葬した後は海にでも捨ててくれればいい、と。まあ、つい最近までそんなことをおもっていたが、ここ数年、身内の年寄りたちが死んでいくのを見る機会が多くなってすこし考え方が変わってきた。

そりゃたしかに、寝たきりの状態を維持するだけの延命処置はしてほしくないし（田村隆一も言っているではないか「言葉が崩壊すれば人間は灰になるだけだ」と）、葬祭センターでの初見の僧侶の読経は苦笑いするしかないし、葬祭センターまかせの進行もばかばかしいし、墓に入りたいという気持ちもない（一応、先祖代々の墓はあるのだが）。灰はどこかへ撒いてくれればいいと今でもおもってはいる。

しかし、なにかの病気で倒れてしまったときは、残された者の感情にまかせてもいい、とおもうようになってきた。いくら、ぼくらの生が言語化されることで仮構されているものでしかない、といったところで、病人が死ぬか生きるかのとき、「生きてほしい」とおもうのは見守っている家族の心情だし、その感情にゆだねてもいいのではないかとおもえるようになってはいる。とはいっても、ほんとうのところは延命処置は不要だと思っておもっているし、葬儀も坊主もいらぬ、そのところは残される者にはつきりいつておいて、そのうえで、残される者の気のすむような処置をしてもらってもいい、とおもえるよう

欠けたコップに水を入れて
ああ、これを飲んだらどうなるのだろう
老婆がりんごを持ってきて
これなら大丈夫だろうという顔で
私の手のひらに押しこむ

結局この村の安宿で三日間眠り
四日目の朝に村を出た
水牛のいる大河沿いを走るバスに乗って

バスが橋を渡り対岸を走るとき
村の一角が見えた
私を救ってくれた村は
まぶしい光のなかに消えていった

引用したのは草野早苗さんの詩集『キルギスの帽子』（思潮社）から「村の一角」全篇。草野さんはかつてオランダのアムステルダムに住んでいて、日本に帰国後も仕事で世界中を「まるで呼び出された巡礼者のように」旅している人らしい。

世界どこにも、悪所、悪意、があるだろう。旅する人もときには悪所、悪意が必要なきがある。

この世間にはきれいごとで生きている人がたくさんいる。だれにも非難されない言説で、だれにも邪魔されない立ち居振る舞いで。ぼくもたぶんそんな薄っぺらな人間のひとりだとおもう。世間を這っていくにはそのほうが便利だし、世間との摩擦

がすくない。

生きていくのは相当しんどいことで、だれかと出会ったり、別れたり、恵まれたり、排斥されたり、だれかを待ったり、待たされたり、強気に出るときもあれば、弱気だらけの何日かを過ごすならなければならないこともある。それでも、妙にきまじめに人は自分の生と向き合っている。自分の生を背負っている。それが世間のわたり方であるともいうように。

しかし、ときには、父親に「絶対に行ってはいけない」といわれた場所への誘惑を拒否できないときがある。汚物と悪意と嘲笑にみちた場所。子どもの水も、老婆のりんごも理路整然とした世間では許されないものだろうが、あえて草野さんはその世界に踏み込む。そうすることで、草野さんは、悪所を呑みこむことで草野さんは、清廉潔白な世間のなかで、その世間の形で歩いてきた日々の汚濁を眠り流すのだ。清廉潔白という汚物を眠り流すのだ。そうするとまたしばらくは生きていける。

この一冊の中でこの一篇に妙にひかれた。悪所が草野さんのオアシスであるかのようなこの一篇に強くひかれた。草野さんは老婆のりんごを食べたのだろうか。

いやいや、悪所がオアシスなんて凡庸なことを言うんじゃない。なんやかんや言っても人は悪所のなかにどっぷりと浸かって生きている。闊歩している。滑空している。そんな悪所のなかに奇跡のようにポツカリと誠実な生が浮かんでいることもある。その千載一遇の瞬間に出会うことが人生の歓びかもしれない。

檻から解放される幼稚な空想にふける

疑似人間の 未来を一変させるには

人間の肉を食った馬にふり落とされた父王の

息子ベレロポーンの脳

コンプラキコスの舌

あるいは宇宙樹の首領オーディンの心臓

アフリカのインコニエックの眼球

アマテラスの甘いバグナ

その他の協力をえて

眼球二つのみならず総入れ替えの

大手術が必要である

それまで待つか ゴドーたち。

嶋岡さんはオクシモロンと言っている。人生の歓びは苦渋に満たされているし、オアシスはいつも干涸らびている。それでも人々は人生の歓びを求め、オアシスを求めている。

嶋岡さんは巻末の「コンプラキコスの弁明」という自己解説のなかでこう書いている。

——コンプラキコスとはあの（わたし）とは一個の他者（un autre）であると告げたランボオの手紙に登場する語で、ユゴーの小説「笑う男」のなかの悪党、誘拐した子供を手術で奇怪な容姿に変え見世物に出す悪党とその恐るべき（創造）「魂を怪物のように創る」（こと）をさしている。——

嶋岡さんは言葉をコンプラキコス化することで、底なしの闇

嶋岡晨さんの新しい詩集『終点オクシモロン』（洪水企画）を読んでいると、そんなおもしろい満たされた。集中から「人間」の寓話の1と2と6。

1

あなたは「人間」に戻りきれない
狐の尻尾を垂らしたまま歩いている
ていねいに化粧する
けれど鏡にうつるのは半ば狼の顔
悲しくても涙にぬれない乾いた仮面
そんな自分が口惜しく遠吠えする

2

どのガラスの靴も その足に合わない
かつて焚いた過去の灰が降りつづける
不眠症の眠り姫のきれぎれの夢に生きている
罪はすぐ大きくなり囚人服も合わない
親指小僧のわたしたち
みんな白馬に跨がったまま凍りつく王子さま

6

コンタクトレンズを嵌め変えても
世界は変わらない
いつそ眼球二つとも そっくり新しいのに嵌め変えてみよう
動物臭い他人の眼 化け物臭い奇形者の眼

に浮かぶ人間（「終点からの一人旅」）、もともと過ちから始まった人間（「消去法による「母」の認可」）、先にそこにいた者の幻にひかれ同じ席に着く人間（「傾くテーブル」）たちの側に立ったとき見えてくるものの残酷でおかしくて聖なるいとおしさを嶋岡さんは、（人間の存在を）告発しながら愛おしくおもっている。嶋岡さんの個性が十二分に発揮されている一冊であり、なんだかんだいったところで嶋岡さんは人間が好きなんだなあ、とついおもってしまった一冊だった。

地方都市で街中の映画館が廃れたのはいつごろからなのかまびらかには知らないが、高知でいえば、イオンモールにシネコンができた2006年（平成18年）で、その年、高知市内の街中の映画館が廃館した。

ほくが子どものころの楽しみは映画ぐらいしなくて、昭和30年代、ほくの暮らしていた土佐山田町というちいさな町にも3軒の映画館があった。大映と新東宝の映画を上映する駅前町の「東洋館」、東映映画の「山田東映」、それと館名は忘れたが、町の西外れに東宝と松竹の映画を上映する映画館があった。

中学、高校とは高知市内の学校に通ったので、学校からの帰りは高知市内の映画館に通いつづけた。そのころはオールナイトというのがあって、徹夜で5、6本の映画を上映したりしていたので、楽しみにしては事欠かなかった。というか、映画ぐらいしか楽しみのなかった時代だった。

5月10日付けの高知新聞に、高知市の愛好家が調べたとこ

ろ、終戦後から現在までのあいだ、高知市で営業していた映画館が46館あった、という記事が載っていた。ピークの1957年（昭和32年）には32館の映画館があり、高知市内中心部の映画館の位置を載せた地図も掲載されていた。その地図を見ながら、中学高校と全館制覇のように通った映画館の立ち姿やにおいなどを思いだした。

子どものころ、弘岡町（いまは南はりまや町というらしい）に叔父の家があつて、泊まりに行くところの映画館へ連れて行ってくれた。その映画館の名前などすっかり忘れていたが、地図を見ると、「高知シネマ」という映画館だったらしい。「高知シネマ」といつても、ちいさく汚い「町の映画館」だった。むかしは町々にちいさな映画館が一軒はあつたような気がする。

いまではイオンモールのなかのT.O.H.Oシネマズ高知が9スクリーンを構えて独占上映している。オープン時、娘に誘われて『宇宙戦争』を見に行ったのが最初で、そのあと何度か足を運んだが、そんなに見たい映画が上映されているわけでもなく、最近足がむかなくなっている。商業施設だから映画の上映も算盤片手にやっているような感じだ。

地味で観客動員がはかれない映画、けつして儲けが出ない映画、それらはときとして人生の立ち位置を変えてくれることもあるのだが、そんな映画は高知では自主上映団体の人たち（何団体あるかはつきりは知らないが）が県立美術館ホールや自由民権記念館で上映してくれているので、かれらにはとても感謝している。ときどき喫茶店でやっているが、あれはスクリーンの位置が目と同じ高さにあつて首が痛くなる。

高知でもまだ単独で上映している映画館が二軒ある。一軒は「小劇」といつてピンク映画専門館で、もう一軒は愛宕町にある「あたご劇場」で、この映画館だけが孤軍奮闘しているような状況だ。最近興味をひかれるような映画を上映しなくなってすっかりごぶさたしているが、10年ほど前まではよく通っていた。ちょうどそのころ娘が大学生で、娘が市川準の『大阪物語』を見たいと言いだしたのをきっかけに、娘とあたご劇場に通ったこともある。宮崎あおいの『害虫』や『春にして君を想う』を見た。『ココシリ』もあたご劇場だったとおもう。

そのあたご劇場と自主上映団体が共同上映もしていて、5月13日、大島渚の『少年』を上映すると高知新聞に紹介記事が載っていた。主演の小山明子からのメッセージも添えて。

『少年』を上映するのは高知を舞台にした映画だからとおもうし、悪い映画ではなかったが、どうせ大島をやつてくれるなら『絞死刑』をもう一度見たいとおもう。『無理心中日本の夏』でもいい、『日本春歌考』でもいい、『儀式』でもいいが、いま一度死ぬまでに『絞死刑』をもう一度見てみたいとおもう。死ぬまでもう一度見てみたい映画、いくつかあるのだが、見られるだろうか。

それにしても懐かしい映画館の名前をしみじみと見つめながら、ただただ懐かしさに浸っていた一日だった。